

近世中期における大庄屋家女性の余暇の行動 ― 摂津国武庫郡上瓦林村岡本家を事例に ―

井原 さやか

(鍛治 宏介ゼミ)

目次

はじめに

第一章 上瓦林村岡本家と岡本家文書

第二章 岡本家当主と女性たち

第一節 宇兵衛とおさよ

第二節 長女おとみ

第三節 次女おさち

第四節 三女おもん

第三章 岡本家女性たちの余暇

第一節 寺社参詣

第二節 芝居

第三節 鉄砲射撃・花火

第四節 疱瘡

第五節 愛玩動物

おわりに

はじめに

江戸時代において十数の村から数十の村を統轄し、身分は農民であるものの名字や帯刀が許されている最上位の村役人を大庄屋という。江戸時代の尼崎藩においてそのような農民的役割と役人的役割を担った人物

の一人が、摂津国武庫郡上瓦林村の岡本家である。

この岡本家の文書群は、八木哲浩氏、今井林太郎氏の調査によって見出され、西宮市史をはじめとして数多くの研究がなされている。たとえば、白川部達夫氏の「享保・元文期の摂津の農業経営と肥料―武庫郡上瓦林村岡本家の場合―」^①では、岡本家文書の「万覚帳」から、岡本家の享保・元文期における農業経営を論じており、この時期の経営状態は決して楽ではなかったとしている。また、大竹秀男氏の「家」と女性の歴史」^②では、岡本家の親類関係を取り上げ、岡本家は重縁関係を結んでおりそれによって縁者といえども親類以上に重い親族になっていたと指摘している。本稿と同じく農村女性の生活を扱った論文として時期、地域は異なるが、長島淳子氏の「近世後期における女性の行動の「自由」と家事労働―武州橘樹郡生麦村『関口日記』を素材として―」^③があり、ここでは日記から豪農関口家の四代にわたる女性の結婚・出産・労働、子どもたちへの教育、そして外泊・外出といった余暇に至るまで論じており、女性の「主婦権」の委譲とそれに伴う家庭内での役割の変化が検討されている。岡本家を扱った研究は、農村構造や農業に関するものが多く一方で女性に関する研究はごく僅かである。そのため本稿では、岡本家の女性に焦点をあてた。

まず本稿の第一章では、上瓦林村の岡本家とそこに残された史料である岡本家文書についてみていき、第二章で岡本家六代目当主である宇兵衛とその妻、そしてその子どもである三姉妹について述べたい。そして第三章では、岡本家文書から読み取れる寺社参詣、芝居、鉄砲射撃・花火といった余暇の行動や疱瘡について、そして岡本家の愛玩動物につい

て取り上げていく。ここから、岡本家の女性たちの生活や暮らしを明らかにしていきたい。

第一章 上瓦林村岡本家と岡本家文書

まず、江戸中期における上瓦林村と岡本家の状況についてみていく。

岡本家のある摂津国武庫郡上瓦林村は、武庫川下流の西岸にあり、宿駅として栄えた西宮町と尼崎藩城下町の間位置している村である。江戸中期は尼崎藩に属しており、この時期の尼崎藩主は松平忠喬・忠名・忠告と松平氏が三代にわたり勤めている。中期の上瓦林村は、江戸時代で最も人口が増えた時期で、約四〇〇人が居住していたという^①。

岡本家は、江戸初頭から尼崎藩瓦林組の大庄屋（郡右衛門）および上瓦林村の庄屋を勤めた家である。寛延三年（一七五〇）の石高は約四〇石であり、上瓦林村において最上層の農家でもあった。農家的側面として、時期はずれるが文政初年の所持していた耕地面積は、九町九反九畝二一歩で、表作では米、木綿、裏作では菜種や麦類、大豆などを栽培していた^②。一方大庄屋や庄屋といった村役人的側面として、新年は尼崎藩主のもとへ御目見や尼崎城内の役人への贈答と挨拶回り、夏になると武庫川普請のための人足の管理などの事務手続、秋には稲収穫前の検見巡村に備えての書状の対応や準備、そして冬になると郷払米や蔵納めでの各方面とのやりとりといった事務作業、そして役人への寒気見舞など一年を通して様々な公務を担っていた^③。このように、日々の農作業に加え、村役人としての職務もあり、岡本家当主のみならず、それを支える妻の役割も非常に大きかったと考えられる。

次に岡本家に残された史料である岡本家文書についてみていきたい。岡本家文書は、江戸時代初頭から明治時代までの約三〇〇年間の尼崎藩政や西摂地方の先進農業構造、農業経営、村の諸行事、日常生活などを知ることができる史料である。約一〇万点にもほる史料は、昭和三四年（一九五九）の『西宮市史』作成にあたり、西宮市史編集委員会によって目録がつくられている^④。また、昭和五四年（一九七九）に西宮市の指定

文化財となっており、現在は西宮市立郷土資料館に保存されている。さらに、その史料の一部は、「にしのみやデジタルアーカイブ」で公開されている。

その岡本家文書の中でも寛保三年（一七四三）から明治一〇年（一八七七）まで、岡本家の歴代当主によって記されたものが、「大庄屋日記」である。岡本家文書の中でも、大庄屋役の公務の様子や神社・寺院への参詣などの日常生活が特によく分かる史料である。本稿では、その中でも江戸中期の岡本家の日常生活を知ることができる「数歳萬覚日記帳」を扱う。「数歳萬覚日記帳」は、延享三年（一七四六）から天明三年（一七八三）にかけて記され、当時の当主である岡本宇兵衛（一七〇二〜一七七九）と市兵衛（一七三三〜一八二二）によって書かれた日記である^⑤。原本の写真は「にしのみやデジタルアーカイブ」で公開されており、西宮市立郷土資料館によって刊行された『研究報告』第九集^⑥、『研究報告』第十一集^⑦で翻刻が行われている。第二章からは、この「数歳萬覚日記帳」から、岡本宇兵衛とその妻、そしてその子供である三姉妹についてみていきたい。

第二章 岡本家当主と女性たち

第一節 宇兵衛とおさよ

まず初めに岡本家六代目当主である宇兵衛について述べたい。岡本宇兵衛は、前述したように本稿で主に扱う「数歳萬覚日記帳」を記し、尼崎藩瓦林組の大庄屋を勤めた人物である。宇兵衛は、元禄一五年（一七〇二）に岡本清五郎の長男として誕生した。この時郡右衛門（のちの大庄屋）は、祖父市兵衛が勤めており、享保八年（一七二三）に父宇兵衛（清五郎）が大庄屋に就任した。その後、享保二年（一七二七）二六歳の時に庄屋に就任し、寛保三年（一七四三）に父宇兵衛の大庄屋退役に伴い、四二歳で大庄屋に就任した^⑧。その二年後の延享二年（一七四五）に長女おとみが誕生していることから、この間に尼崎築地町の舟屋治兵衛の娘であるおさよと四二、三歳の頃に結婚していると考えられる。そ

の後、延享二年（一七四五）四四歳の時に長女おとみ、延享四年（一七四七）四六歳の時に次女おさち、宝暦三年（一七五三）五二歳の時に三女おもんが誕生した。このように宇兵衛とおさよの間に三人の女子が誕生したものの、男子（嫡男）には恵まれず、おとみの婿が岡本家を継ぐ後継者となるのである。宝暦二年（一七五二）五二歳で大庄屋を退役し、宝暦四年（一七五四）に跡継ぎである山田村吉田清右衛門の息子又五郎が養子として入った（⑨四八頁）。宝暦六年（一七五六）には、岡本家を養子の勘四郎（又五郎）に譲り、勘四郎は庄屋に就任した。宝暦一〇年（一七六〇）には勘四郎と長女おとみが内婚礼を挙げ（⑨六〇頁）、その後市之進、菊次郎といった孫も多く誕生している。

大庄屋退役後は、西国三十三所巡り、伊勢参りといった寺社参詣や芝居見物に行っており、そこに娘や孫たちを連れていつている様子がよく

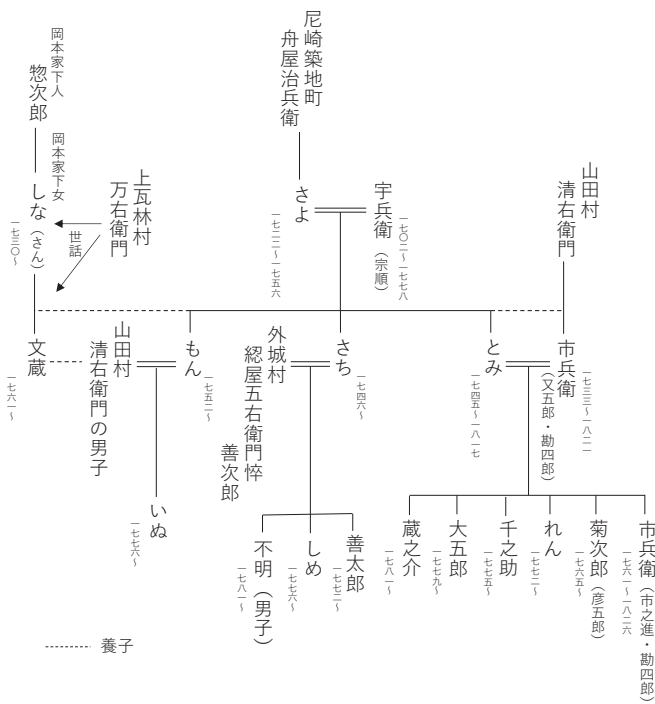


図1 岡本家系図

（『研究報告』第9集、第11集と前掲注(四) 衛藤論文より作成）

見られる。ここから宇兵衛が仕事で忙しい父市兵衛（勘四郎）や母おとみに代わって孫たちの世話もしている面倒見の良い性格が感じられる。また、植木などにも熱心で、きんかんや梅の木などを植えていたり、草花を買ったりしている様子も見られる。

そのような宇兵衛であったが、安永七年（一七七八）の二月に食べ物などの詰まらせて灸治療を行っており、この頃に膈噎（胃がんまたは食道がん）の病気の疑いがあったようである（⑪七一頁）。安永八年（一七七六）の二月一五日にはその病気の薬を処方されているもの（⑪七二頁）、二〇日の晩からさらに悪化し食事でもできなくなり、四月二五日に七八歳で亡くなった（⑪七三頁）。亡くなる九日前の一六日には長女おとみが四男大五郎を出産し、宇兵衛（宗順）がこの名前を付けている（⑪七三頁）。一三日には三女おもんが、二四日には次女おさちが嫁ぎ先からお見舞いに来ている様子が見られる（⑪七三頁）。

次に三姉妹の母親であり、宇兵衛の妻であるおさよについて述べたい。おさよは、尼崎築地町舟屋治兵衛の娘であり、享保・元文期に岡本家が舟屋治兵衛から肥料の干鰯を購入していることから、結婚以前からつながりがあったと考えられる。宇兵衛とおさよの結婚時期については明らかではないものの、宇兵衛とは二〇歳離れた年の差夫婦であった。長女のおとみは、おさよが二四歳の時に出産し、その二年後の二六歳の時に次女おさち、その六年後の三二歳に三女おもんが誕生している。宇兵衛や子どもたちと外出する記録はあまり見られないものの、長女おとみを出産した一か月後に中山寺（現・宝塚市）におとみを連れて参詣に行ったり（二五頁）、尼崎貴布禰神社の神事に宇兵衛とおとみと訪れたりしている様子が日記から見られる（⑨二七頁）。

そのようなおさよであったが、宝暦五年（一七五五）の秋頃からは病気になるってしまう。治療のため宝暦六年（一七五六）の一月まで医者である西宮三立老のもとへかかるものの良くはならず、二月五日には大坂で借家を借り小いづみ立正老の治療を受けている。しかしそれでも回復しなかったため、二月一八日には実家のある尼崎築地町舟屋へ帰り養生している。そして、二月二二日に三五歳でこの世を去った（⑨五二頁）。長女おとみは一歳、次女のおさちは九歳、三女のおもんは三

歳であった。翌年の宝暦七年（一七五七）には宇兵衛によって知恩院の北にある一心院へ納骨されている（⑨五四頁）。岡本家文書のなかには葬儀記録も多く残っており、おさよの香典記録を見ると村外の約四〇人から金銭や練香、豆腐、みかん、餅といった香典が送られており、これほどの数は大庄屋の妻だからであろう^(五)。

第二節 長女おとみ

続いて、岡本家にとって重要な存在である、長女おとみについてである。おとみは、延享二年（一七四五）の二月八日に父宇兵衛が四四歳、母おさよが二四歳の時に誕生した（⑩九六頁）。その出生の様子について詳しくは記載されていないものの、その翌年からこの「数歳萬覚日記帳」を書きはじめていることから、おとみの成長の記録として書いた日記とも捉えることができる。また、父宇兵衛が年齢を重ねてからできた第一子であるからか、延享四年（一七四七）の正月二十八日には宇兵衛が清荒神清澄寺（現・宝塚市）に行った際に富札三枚におとみの名前を入れたことが書かれており（⑨二九頁）、おとみを溺愛している様子もうかがえる。おとみの幼少期は、宇兵衛やおさよ、その後誕生する妹のおさち、おもんとともに寺社参詣にいたり、芝居や鉄砲射撃・花火を見に行ったり、痲瘡に罹ったりなどしている。これらに関しては、第三章で詳しく述べる。

次におとみの結婚についてである。おとみは、宝暦一〇年（一七六〇）一月二十六日に一六歳で、岡本家の養子である勘四郎と内婚礼を挙げ（⑨六〇頁）、翌年の二月二〇日に村中に披露した（⑨六四頁）。この勘四郎というのは、山田村吉田清右衛門の息子で宝暦四年（一七五四）の閏二月一四日に二一歳で岡本家に養子として迎えられた人物である（⑨四八頁）。つまりこの時から勘四郎が岡本家の次期当主であり、長女おとみの結婚相手と決まっていたのである。この勘四郎の実家のある山田村は上瓦林村と同じ瓦林組に属しており、養子に迎える以前から宇兵衛は勘四郎の父である清右衛門宅に年礼に行き、その後夕食をご馳走になっていることから親同士の親交も深かったと考えられる（⑨二九頁）。山田村の清右衛門について詳細は明らかにはできなかったが、山田村は江戸時代

中後期のものと思われる江戸積酒屋番付「銘酒つくし」^(七)でも東の前頭の筆頭に位置づけられており、酒造りが盛んに行われている村であった。

そしておとみは、内婚礼の翌年の宝暦十一年（一七六一）一七歳で嫡男である長男市之進を出産した（⑨六四頁）。この一カ月前には、のちに岡本家の養子になり、おとみの弟にあたる文蔵も誕生しており（⑨六四頁）、市之進はこの同じ歳の文蔵とともに行動することが多い。宇兵衛が文蔵を養子として迎えた理由について日記からは知ることはできないが、生まれた日に宇兵衛が名付けていることから岡本家の養子ということは決まっており、おとみの子どもが女子であった場合の跡継ぎ候補だったのではないかと考えられる。その後、明和二年（一七六五）二一歳で次男菊次郎（⑨八一頁）、明和八年（一七七二）二七歳の時に長女おれん（⑩二三頁）、安永四年（一七七五）三一歳で三男千之助（⑩四六頁）、安永八年（一七七九）三五歳の時に四男大五郎（⑩七三頁）、そして天明元年（一七八一）三七歳で蔵之介（⑩七五頁）を出産し、五男一女の子宝に恵まれた。父宇兵衛が亡くなり、夫である市兵衛（勘四郎）が「数歳萬覚日記帳」の続きを記していたものの四年で途絶えてしまったため、おとみの三八年間の記録しか分からなかった。しかし、最期については文化一四年（一八一七）の宗門人別帳からこの年の七月二日に七三歳で病死したことが記録されている。

第三節 次女おさち

続いて岡本家の次女であるおさちについて述べたい。おさちの出生に関しては、日記に記載されていないものの、寛延三年（一七五〇）の宗門人別帳から見るに、当時四歳であったことから延享四年（一七四七）に誕生したと推測できる。父宇兵衛が四六歳、母おさよが二六歳、長女おとみが二歳の時であった。幼少期は、父宇兵衛や姉おとみ、妹おもんとともに寺社参詣や芝居、鉄砲射撃・花火見物をしている。また、三姉妹のうち結婚後嫁ぐ形になるためか、おさちのみ一歳の時に尼崎築地町へ手習いに行っている様子も日記から確認できる（⑨五三頁）。

結婚に関しては、明和七年（一七七〇）の三月二日、二四歳の時に伊丹外城村の総屋五右衛門（大塚家）の息子である善次郎と婚礼結納を

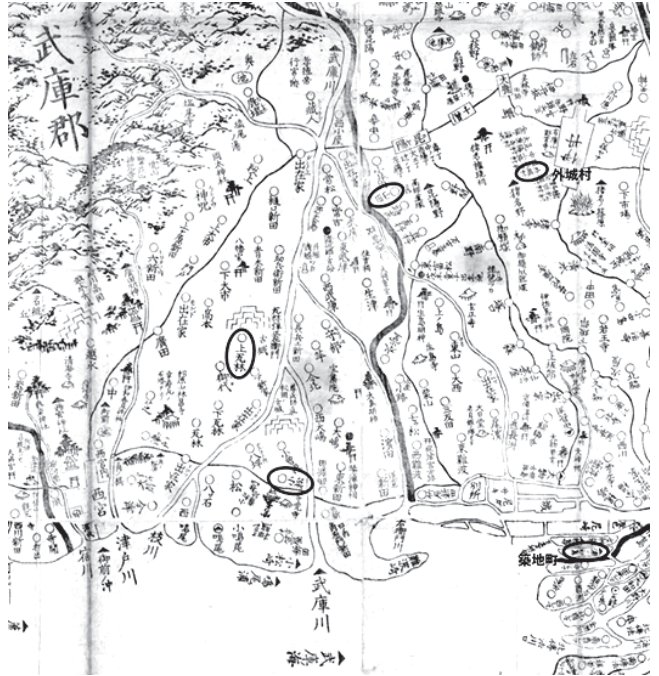


図2 上瓦林村・山田村・外城村の位置関係
『新改正撰津国名所旧跡細見大絵図』
(天保7年、にしのみやデジタルアーカイブ)

行っている(⑪一四頁)。この総屋は、江戸中後期の江戸積酒屋番付においても西の前頭にいくつも銘柄が記載されているほどの酒造家で、宝暦期においても伊丹酒造家のなかでも出荷高が首位になるほどの大きな家である。結婚以前の岡本家とのつながりは日記からは確認できなかったものの、大庄屋の娘であるからこそ同等な嫁ぎ先である酒造家に嫁いだのだろう。前述したように、長女のおとみの場合は結婚後も岡本家に残る形になるが、次女のおさちの場合は総屋に嫁ぐことになる。そのためか嫁入り後は名前もおさちからおじゅんへと変化し、岡本家へは年礼や盆礼、上瓦林村の神事の時などに数年に数回訪れる形となる。子どもに関しては、明和九年(一七七二)に二六歳で長男善太郎を出産し(⑪三〇頁)、安永五年(一七七六)三〇歳の時に長女おしめ(⑪五四頁)、天明元年(一七八一)に三五歳の時に次男(名前不詳)が誕生している(⑪七四頁)。

おさちに関しては、三姉妹のうち唯一疱瘡に罹らなかったのだが、結婚後長く病気を患っている。長女おしめの出産後、安永六年(一七七七)に養生のため一カ月ほど岡本家に帰省しており(⑪六三頁)、翌年も一カ月子どもたちを連れて岡本家へ帰っている(⑪七〇頁)。そして病気を患いながらも次男を出産し、天明元年(一七八一)には、「伊丹公使参り、お寿んとの病気、種物病長々之義宜敷無御座候二付、京都へ伏見ひうこ正源老へ参候度療治請」(⑪八〇頁)と書かれていることから、病気のため伏見のひうこ正源老のもとへ行き、診察を受けている。天明二年(一七八二)には、息子善太郎とともに但馬へ行き、一カ月ほど湯治を行っている様子が見られ(⑪八三頁)、ここからも長年病気を患っており、良くない様子が見え始める。そのようなおさちであったが、嫁ぎ先である外城村の宗門人別帳が現存していなかったため、最期は明らかにできなかった。

第四節 三女おもん

最後に三女のおもんについてである。おもんは、宝暦三年(一七五三)父宇兵衛五二歳、母おさよ三三歳の時に誕生しており(⑨四七頁)、長女おとみとは八歳、次女おさちとは六歳離れている。幼少期は、父宇兵衛姉のおとみ、おさちとともに寺社参詣や芝居、鉄砲射撃・花火を見に行っている。しかし、宝暦一〇年(一七六〇)の一〇歳の時に疱瘡に罹り(⑨六一頁)、その後完治しているものの、明和三年(一七六六)一五歳の時には目の病気になるようになっていられる(⑨八七頁)。目の病気に關しては、『雨月物語』で有名な上田秋成の治療を行った播磨の眼科医である谷川良順のもとで三度診察を受けている(⑨八七・九〇頁)。その後完治したのかは不明であるものの、鉄砲射撃・花火の見物、寺社参詣をしていることから回復したことがうかがえる。

結婚に関しては、安永五年(一七七六)の四月から山田村吉田清右衛門のもとへ移り住んでおり(⑪五五頁)、そして翌年の安永六年(一七七七)四月一日、二五歳で山田清右衛門の男子と結婚し、村中に披露している(⑪六一頁)。つまり、姉おとみの夫とおもんにとっては義兄にあたる市兵衛の実家に嫁いだことになる。また、おもんが村中に披露す

る少し前の四月一日には、岡本家に養子として迎えられており、おもんの八歳下の弟にあたる文蔵も山田へ養子に入っていることから姉弟で同時期に山田村へ移ったことになる(⑪六一頁)。結婚後は、岡本家へ年礼や盆礼、上瓦林村の神事に訪れており、ときには文蔵とともに来ることもある。出産に関しては、安永八年(一七七六)の三〇歳のときには、長女おいぬが誕生している(⑪七四頁)。おもんの最期であるが、おさち同様、山田村の宗門人別帳が現存していなかったため、明らかにできなかった。

この後の岡本家の結婚による親類関係について少し述べたい。この山田村吉田家と岡本家の関係はその後も続き、おとみの三男千之助が吉田家の養子となり、おとみの孫にあたる長男(市之進の息子)の嫁を吉田家から迎えている。また、おさちの嫁ぎ先である外城村総屋大塚家も、おとみの長男である市之進の嫁をこの大塚家から迎え、長女おれんを大塚家へと送り、次男菊次郎も養子として大塚家に入っている。このように長女おとみの結婚、次女おさち三女おもんの嫁入りをきつかけに岡本家は山田村吉田家と外城村大塚家と重縁関係となったのである。

第三章 岡本家女性たちの余暇

第一節 寺社参詣

第一章では、大庄屋日記から見える江戸中期に活躍した岡本家の当主宇兵衛とその妻として三姉妹の半生を概観した。本章では、女性たちの余暇の行動を詳細に見ていきたい。具体的には、日記によく記載が見られる寺社参詣、芝居、鉄砲射撃・花火、疱瘡、愛玩動物について取り上げる。なお岡本家には、血縁関係のある家族以外にも、三世帯の家持下人を抱えており、本章でみていく余暇の行動でも一緒に行っていることも多い。

この「数歳萬覚日記帳」で最も見られる記述として、寺社参詣が挙げられる。それは、当主である宇兵衛が寺社参詣に熱心だったからである。宇兵衛は、「数歳萬覚日記帳」が書かれた延享三年(一七四六)から天明

三年(一七八三)までの三七年間で五七九回も参詣が確認でき、西国三十三所巡りをしたり、中山寺に月参りをしたりしている。伊勢神宮には生涯で二四度訪れており、こういったことから信仰の厚さを感じられる。では、その子供たちはどうであったのだろうか。おとみ、おさち、おもん、それぞれの寺社参詣の記録を表一にまとめた。

まず長女おとみであるが、おとみは三七年間に二七回と宇兵衛と比較すると非常に少ない。その中で最も訪れた場所として、中山寺が挙げられる。中山寺(現・宝塚市)は、上瓦林村よりも北にあり、現在の距離で約一〇キロメートル離れた場所に位置している。真言宗中山派の総本山であり、聖徳太子によって建立されたと伝えられている寺院である。西国三十三所の第二十四番札所で、現在は安産祈願の寺院としてよく知られている。おとみは、この中山寺に二七回のうち一〇回訪れており、そのうち六回は三月中旬とかなり偏っている。これに関して寛政八年(一七九六)に刊行された『撰津名所図会 河邊郡六下』には、「毎歳三月中旬・八月中旬無縁経修行」と記載があることから、こうした行事に合わせて訪れていることが分かる。この無縁経とは、近親の故人に対してあげるものであり、中山寺では元禄一三年(一七〇〇)からこの無縁経法要が行われていた。近親の故人に対してということもあり、おとみの母おさよが亡くなった翌年の宝暦七年(一七五七)三月十九日と祖父である宗貞が亡くなった宝暦八年(一七五八)三月十七日には宇兵衛、おとみ、おさち、おもん和家人総出で参詣している(⑨五三・五五頁)。また、宇兵衛が亡くなった安永八年(一七七九)八月一日にも市兵衛とおとみ、長男市之進が参詣している様子がみられる(⑪七五頁)。

撰津名所図会には現在のような安産祈願で有名な寺院といった記載はなかったものの、天明五年(一七八五)に著された『中山観音夢物語』では「中山乃観音様も産婦を御護りなさんと聞き及び」としていることから江戸中期頃には安産信仰があったようである。これについておとみの父である宇兵衛も、おとみが長男市之進を出産した際に「中山寺参詣、二月不参、殊におとみ安産乍御礼参り申し候」(⑨六四頁)と記していることから安産祈願の寺院として認識されていたことがうかがえる。おとみ自身も、妹おもん(三女)が誕生した二か月後(⑨四七頁)、おとみ

表1 岡本家三姉妹参詣の記録

年次	おとみ			おさち			おもん			
	月	日	行先	月	日	行先	月	日	行先	
延享3	3	10	中山寺							
	3	6	29	貴布禰神社						
	4	3	10	西宮神社						
	4	6	30	貴布禰神社						
寛延1	3	21	守部素戔鳴神社							
宝暦1	2	2	昆陽寺	2	2	昆陽寺				
	1	3	18	中山寺、昆陽寺	3	18	中山寺、昆陽寺			
	3				2	2	昆陽寺			
	3	3	18	中山寺	3	18	中山寺			
	7	3	19	中山寺、昆陽寺	3	19	中山寺、昆陽寺	3	19	中山寺、昆陽寺
	8	3	17	中山寺、昆陽寺	3	17	中山寺、昆陽寺	3	17	中山寺、昆陽寺
	8				9	11	岡太神社	9	11	岡太神社
	9	3	18	伊勢神宮	3	18	伊勢神宮			
	9	3	23	愛宕神社	3	23	愛宕神社			
	9							9	11	岡太神社
	10				4	8	中山寺、昆陽寺			
	10	7	10	極楽寺	7	10	極楽寺	7	10	極楽寺
	11				3	18	中山寺、昆陽寺	3	18	中山寺、昆陽寺
	12							2	5	昆陽寺
	12							2	18	正行寺
	13	3	5	正行寺	3	5	正行寺	3	5	正行寺
	13							6	25	西宮神社
	13	6	29	貴布禰神社						
明和1								3	6	大行院
	1	3	8	大行院						
	1							3	26	不明(西宮開帳)
	2	3	19	中山寺	3	19	中山寺	3	19	中山寺
	2							10	20	西宮神社
	4				4	10	昆陽寺	4	10	昆陽寺
	5	3	11	神呪寺	3	11	神呪寺	3	11	神呪寺
	6	2	3	昆陽寺						
	6	3	17	中山寺	3	17	中山寺	3	17	中山寺
	7	2	3	昆陽寺						
	7							4	8	伊勢神宮
	8	2	3	高皇産靈神社						
	8	8	19	中山寺						
安永2	2	3	昆陽寺							
	8	7	10	極楽寺						
	8	8	18	中山寺						
天明3	4	18	多田神社、満願寺、中山寺							

『研究報告』第9集、第11集をもとに作成

が次男菊次郎を出産した二か月後(⑨八二頁)、長女おれん出産の二か月後に訪れている(⑩二三頁)。
次に中山寺に続いて多い場所として昆陽寺が挙げられる。昆陽寺(現・伊丹市)は、上瓦林村の西にあり、約五キロメートル離れた場所に位置している。真言宗に属しており、江戸時代においては行基によって貧民救済施設として建てられた昆陽布施屋を継承する施設と見なされていた寺院である。そのため日記でも昆陽寺のことを「行基参り」と記載され

ていることが多い。おとみはこの昆陽寺に七回訪れており、それも二月二日・三日、三月中旬とこちらもかなり偏っている。また、二月は昆陽寺のみ参詣を行っているが、三月は中山寺の後に立ち寄っているといった特徴も見られる。二月二日については、『諸国関会年中行事大成』などに二月二日に昆陽寺の年中行事として行基参りが紹介されているため、これに参加していたと思われる。また、江戸時代に発行された昆陽寺の略縁起では、昆陽寺の薬師如来が衆生の病苦をたすけるという説話と行

基が掘った井戸の水を飲むと疱瘡に罹らないという説話も記されている。これらから病氣治癒の御利益を求めて毘陽寺を訪れていたと考えられる。三日には決まって山田村へ年礼を行って、そこからそのついでに毘陽寺を訪れていたことが分かった。山田村は、毘陽寺のすぐ南に位置し市兵衛の実家のある村であるため、新年の挨拶を行っていたのである。第一章でも少し述べたが市兵衛との婚姻以前にも、宇兵衛に連れられ毘陽寺に行き、その後山田村吉田清右衛門（市兵衛の父）のもとへ年礼ついでに夕食をともししていることから、以前から年礼は行っていたようである。しかし結婚後の変化としては、宇兵衛ではなくおとみが子どもたちを連れて挨拶に行っていることである。以前から親交があったものの、結婚を機に山田村への年礼が宇兵衛からおとみの役割になったのである。三月中旬に関しては、同日中山寺を訪れた後に立ち寄っていることから、無縁経修行のあとについて訪れたのではないかと考えられる。

おとみに関してはこの二つの寺院がよく見られたが、他にも檀那寺である極楽寺（現・西宮市）、西宮神社（現・西宮市）、貴布禰神社（現・尼崎市）、守部素戔嗚神社（現・尼崎市）、正行寺（現・西宮市）、大行院（現・尼崎市）、高皇三産霊神社（現・伊丹市）、多田神社（現・川西市）、満願寺（現・川西市）、愛宕神社（現・京都市）、そして伊勢神宮（現・伊勢市）を訪れている。極楽寺へはお墓参りで、貴布禰神社・高皇三産霊神社は神事、守部素戔嗚神社・神呪寺・多田神社・満願寺は開帳、正行寺は説法、大行院は護摩法要の際に訪れており、ほとんどは催し物がある日で、日常的に参詣している様子はあまり見られない。また参詣の範囲についても、そこまで遠方に出かけるといった様子は伊勢神宮、愛宕神社を除いては見られない。

では次にその伊勢参り、愛宕神社への一二日間に及ぶ長期旅行の様子を紹介したい（⑨五八頁）。その経路に関して図3に示した。

宝暦九年（一七五九）三月一三日に当時五八歳の父宇兵衛と一五歳の長女おとみ、一三歳の次女おさちを含む上瓦林村の村民二四人が村を出発した。その夜には尼崎築地から渡廻船二艘で大坂へ向かったようである。渡廻船の他にも、馬二頭と駕籠も用意され、おとみは馬に乗り、おさちは駕籠に乗って移動していた。一日に大坂難波橋から松原（現・

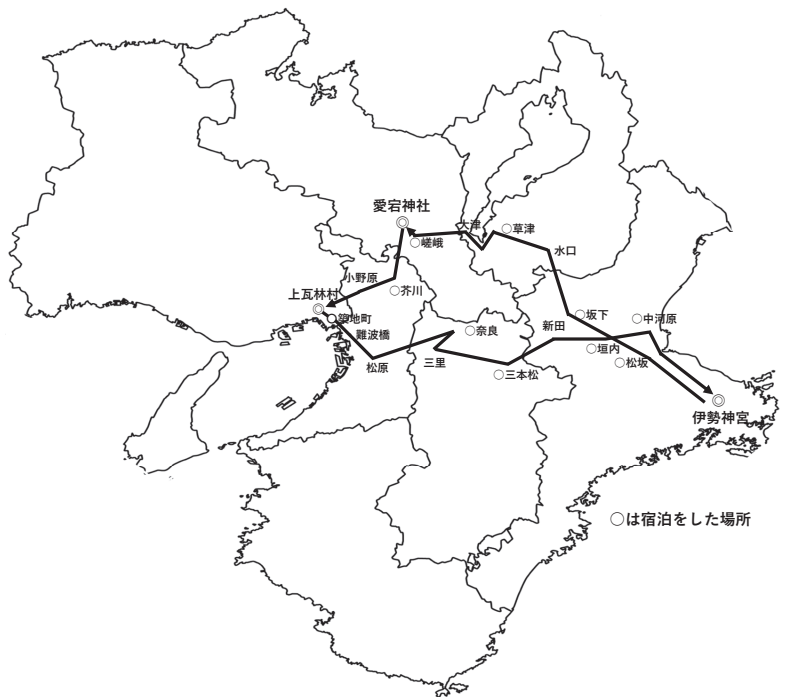


図3 宝暦9年の伊勢参りの経路
『研究報告』第9集をもとに作成

大阪府松原市) を経由し奈良池田屋庄左衛門のもとで一泊し、一日は三里（現・奈良県生駒郡）から三本松（現・奈良県宇陀市）へと移動している。一六日には、新田（現・三重県名張市）から垣内（現・三重県津市）へと進め、一七日には、伊勢街道沿いの宿場町である六軒茶屋へと到着し、旅籠屋である中河原松屋太兵衛のもとで一泊している。翌日一八日には、御師である山田御師民部太夫のもとへ訪れた後、伊勢神宮へお参りをし、その夜は御師宅で宿泊したようである。一九日は松坂すが屋喜兵衛で一泊し、そこから上瓦林村へと戻るのではなく、二〇日の夜には坂下（現・三重県伊賀市）へと移動し京屋権左衛門へ泊っている。

二一日には水口を經由し草津の銭屋へ泊り、二二日には、大津、嵯峨へ進めた。そして二三日に愛宕神社へと到着したのである。しかしゆつくりと休むことはなく、その夜には芥川（現・高槻市）へ向かい、二四日には、小野原（現・箕面市）へ移動し駕籠を用意してもらっている。そこから下河原（現・伊丹市）を經由して一四時ごろに上瓦林村へ到着したようである（⑨五八頁）。

一二日間で近畿地方を一周する、その総距離およそ五〇〇キロメートルにのぼる長期旅行であった。伊勢神宮までは六日で到着しており、船や馬・駕籠を使つてはいるものの、そのほとんどは山道であったため、五六歳の宇兵衛にとって非常に体力のいる旅行である。旅行メンバーは、上瓦林村の村役人二四人で構成されており、うち一六人が男性で八人が女性である。女性は村の年寄や本役人、半役人の妻や娘であり、妻の場合は単独で、娘の場合は父親と参加している。また、その年齢も一三歳から三七歳と幅広いものの一〇から二〇代の娘が多くみられる。このようにおとみやおさちにとつて同年代の女性との交流もあったようである。伊勢神宮に関しては、おとみ、おさちだけでなく、三女おもんも明和七年（二七七〇）、一八歳の時に市兵衛と村民数人で伊勢参宮を行っていることから、三姉妹全員結婚前に伊勢神宮に訪れている（⑪一四頁）。

続いて、次女おさち、三女おもんの参詣についてだが、おさちは一七回、おもんは一八回寺社へ訪れていた。その場所としては、中山寺と毘陽寺が圧倒的に多く、おとみとの違いもあまり見られない。ひとつ異なる点としては、岡太神社に参詣していることである。岡太神社は、上瓦林村の南に位置している小松村にある神社で、第三節の「鉄砲射撃・花火」でも登場する小松武兵衛がこの小松村に住んでいた。宇兵衛はこの小松武兵衛と親交が深かったため、小松神事の際にその会場である岡太神社を訪れていた。そのため、おさちやおもんも宇兵衛に連れられて小松神事が行われる九月一日に岡太神社へ参詣に行っているのである。また、参詣範囲もおとみと同様に伊勢神宮、愛宕神社以外は、周辺の寺社である。

表を見てみると、三姉妹でそろって行くことは七回とそれほど多くはみられず、年の近いおとみとおさちは一〇回、おさちとおもんも一〇回

であり、次女であるおさちは大半姉おさちか妹おもんともに行つていくといった特徴がみられる。

続いて岡本家の長女おとみとおとみ長男であり当主となる市之進（勘四郎）との参詣記録を比較し、そこから岡本家の男女の違いを見ていきたい。

おとみが寺社を訪れた回数として三七年間で二七回であったが、市之進は二二年間で九三回とおとみより期間は短いものの、三倍以上の数を訪れている。おとみが最も訪れた場所として中山寺を挙げたが、市之進は比較的上瓦林村から近い西宮神社に三二回訪れている。その大半が一月一日、八月二二日であり、一月一日は十日戎、八月二二日は西宮神事といった行事のある日に参詣している。十日戎は現在でも行われている西宮神社を象徴する祭事であるが、江戸中期後半から栄え始めたよう一日に約一〇万人が参拝するほどの賑わいであったという。八月二二日に行われた西宮神事は、十日戎に匹敵するほどの盛況ぶりであり、出店や見世物小屋が立ち並び、相撲も行われていた。この様子について安永五年（一七七六）の日記には「昼過分拙者・市之進・菊治郎同道、御戎太神へ参り、曲馬見物致シ」（⑪五八頁）と書かれていることからこの日は曲馬が見世物として行われ、岡本家の男性たちが見に行っていることがうかがえる。

また、全体的な参詣場所についても違いがみられる。おとみはほとんどが現在の宝塚市、伊丹市といった村周辺の寺社であるが、市之進の場合は幼少期は周辺の寺社がよく見られるものの、元服後（安永五年以降）は北野天満宮（京都府）や金剛山転法輪寺（奈良県）大峰山寺（奈良県）といった遠方に数日かけていくことが多い。

それ以外にもこの日記には、誰と参詣に行ったかやどこで誰と出会ったか、どこに立ち寄ったかが詳しく記載されている。おとみが参詣に行く際は、父の宇兵衛や妹のおさち、おもん、そして奉公人といった岡本家の人物と行くことが多くみられ、それ以外の人と行く場合は、同村や他村の妻（かか、内儀）といった女性とともに行くこともよく見られる。その一方市之進の場合は、幼少期は岡本家の人物と、元服後は同村や他村の男性と複数で行くことが多い。

このように、おとみの参詣記録を中心に岡本家の女性の参詣記録を見てきたが、女性は圧倒的に中山寺が多く、そのほとんどが三月中旬・八月中旬の無縁経法要が行われる日であった。毎年必ず訪れることはないものの、母や祖父、父といった家族が亡くなった場合は、その亡くなった日から近い三月か八月の中旬には家族全員で必ず中山寺へ訪れている。また江戸時代にも現在のような安産信仰があつたため、子供が生まれたときにも御礼参りをしている様子も見られる。昆陽寺に関しては、山田村への年礼が市兵衛との結婚を機に宇兵衛からおとみの役割に変化し、その年礼ついでに昆陽寺へ訪れていたのである。また、この時には清右衛門宅で夕食を食べたり、宿泊したりしている様子も見られる。岡本家の男性と比較すると、参詣回数も少なく、範囲も狭いものの、神事や仏事などの催し物のある日に訪れることが多く、何もない日に参詣することはほとんど見られない。そのため、日常的に頻繁に行くことも少なかったのである。

第二節 芝居

岡本家の女性たちは人形操りや歌舞伎といった芝居にもよく見に訪れている。その主な場所として、道頓堀、産所（現・西宮市）、守部（現・尼崎市）、出屋敷（現・尼崎市）が挙げられる。まずは、この芝居場所について述べてみたい。

道頓堀は、江戸時代に江戸三座・浪花五座といわれ、弁天座・朝日座・角座・中座・竹本座（浪花座）を中心に、多くの芝居小屋が存在する場所である。道頓堀では、歌舞伎、人形浄瑠璃など様々な見世物が行われており、岡本家も頻繁ではないものの、歌舞伎や鳥の見世物、小人見物を行っている。

産所は、岡本家が最も芝居を観に訪れている場所である。そのためこの場所については詳しく述べていきたい。まず産所村（現・産所町）は西宮神社の北部に位置している村であり、住民の多くが傀儡子であった。江戸前期には宮中でも人形操りを披露するほどで、寛永一五年（一六三八）には東福門和子が見るほどの技芸であつたという。中期になると、宮中で披露する機会は減少したものの、享保五年（一七二〇）には尼崎藩

主松平遠江守忠喬の息女が産所の芝居を見物したり、明和元年（一七六六）に西宮の上流階級の当舎亀山の家族が見物したりするなど、殿様階級や上流階級の人が見にくるほどであった。その一方で、寛保元年（一七四一）、二年（一七四二）には、「産所村の儀近年退転前同に困窮」との記事もあり、芝居は続いているものの、厳しい状況がうかがえる。そして後期の文化二年（一八〇五）の正月には、操り人形の衣装四三五点を困窮のため、西宮の町人に売り渡してしまい、天保末期には産所村の芝居小屋も移され、やがて取り壊された。その後も吉田吉五郎一座が巡業を行ったり、芝村の一座が人形を引き継いだりしたものの、明治の終わりごろには全て廃業した。このように、産所村の人形操りは、江戸前期には宮中で披露するほどであり、中期でも位の高い人物が見に来るほどのものであつた一方で、経済的に苦しく後期には衰退していった。^(三三)

守部は、上瓦林村の武庫川を隔てた隣にある村である。芝居が行われた場所として断定はできないもの、守部素戔鳴神社・来迎寺または現在は残っていない寿福寺ではないかと考えられる。

出屋敷は、尼崎城にほど近い場所であり、町人が居住する町場であつた。芝居小屋の有無に関しては明らかにされていないが、日記でも芝居を見に行っている事例は少なく、常設ではなく、仮設の芝居小屋や巡業で行われていたと考えられる。

では日記から岡本家の女性たちの記録を見ていきたい。

まず初めに見られるのは、延享五年（一七四八）三月二一日で、宇兵衛が長女おとみを連れて上瓦林村の万右衛門、亀松、おさよとともに守部（現・尼崎市）で開帳を見に行った際、芝居「義経千本桜」を見ている（⑨三四頁）。「義経千本桜」は、延享四年（一七四七）十一月に大坂本座で人形浄瑠璃から始まった芝居で、歌舞伎として行われるのは延享五年の五月であることから、ここでは人形浄瑠璃の芝居であつたと思われる。^(三五) 浄瑠璃三大傑作の一つといわれているほど人気の高い作品であるが、この物語の中にも宇兵衛やおとみにとっても身近に感じる場面がある。それは、義経が頼朝の追討から逃れるため廻船問屋で九州行きの船を待っているときに源平合戦で死んだはずの平知盛が廻船問屋の主人に扮装して義経に復讐をしようとする場面である。この場面の舞台が、尼

崎であったのだ。そのため、芝居を好んでいた宇兵衛にとっても大注目の作品だったのかもしれない。また、同日には産所でも人形操りを見ており、この日は芝居三昧の一日であったようだ。その四日後の二五日にも宇兵衛が同村の平兵衛、幸十郎、忠兵衛、熊次郎ともに守部へ行き、四歳のおとみは奉公人と考えられる善兵衛に連れられ後から合流し、守部で芝居を見ている(⑨三四頁)。ここでは、芝居の演目については書かれていないものの、この日は開帳といった仏事を目的に來たのではなく、芝居を見に守部へ訪れている。

次に見られるのは、寛延二年(一七四九)七月二七日で、宇兵衛がおとみ、下女そめ、下男久蔵とともに、大坂伏見堀彦兵衛へ盆礼に行った際に、道頓堀で歌舞伎を見ている(⑨三八頁)。「廿七日、道頓堀芝居、座本嵐三五郎、高麗橋踊念仏政井宗味密使敵討之事見物」と書かれており、嵐三五郎座で「高麗橋姫踊念仏」を見たようである。この「高麗橋姫踊念仏」は、同年の五月に嵐三五郎座で初演を迎えていることから、そのすぐ二か月後に岡本家が見に行っていることになる。この作品について少し紹介すると、政井宗味の妻おかねが不倫をしたため、高麗橋でおかねとその不倫相手である男を討つ話である。当時五歳のおとみにとって、非常に難しい話であっただろう。この日は私的な用事であったため岡本家の人物だけで見に行っている。

宝曆七年(一七五七)四月八日には、「おさち筑地へ手習二参り候砌、おとみ・おもん同道。供二さん遣し、出や敷芝居見物仕」(⑨五三頁)と書かれていることから、次女おさちが築地へ手習いに行く際に長女おとみ、三女おもんそして二七歳岡本家の下女であるさん(文蔵の母)が行し、その後築地町からほど近い出屋敷で芝居を見ている。この日は、一三歳のおとみ、一一歳のおさち、五歳のおもんと珍しく宇兵衛は同行していない。

続いて見られるのは、宝曆十三年(一七六三)五月一三日で、「西宮産所二奥州安田池原芝居仕候二付、おさち・おもん、弁当持下女よね召つれ、跡合当村孫三郎被参、同座二罷在候」(⑨七三頁)とあり、宇兵衛と当時一七歳の次女おさち、一一歳の三女おもん、下女よねと後から来た上瓦林村の孫三郎とともに産所で「奥州安達原」を見に行っている。「奥

州安達原」は宝曆一二年の九月に大坂道頓堀の人形浄瑠璃を行う竹本座で初演が行われており、産所でもすぐに取り入れられ、公演されたようである。この「奥州安達原」は前九年の役で源義家に敗れた安倍貞任・宗任兄弟が再挙を図る話で、特に三段目「環宮明御殿」が有名である。ここでは、貞任の妻袖萩が夫と官軍方の父との板ばさみとなり自害をするといった物語で、メインが女性であったことからおさち、おもんにとっても身近に感じる話であっただろう。

岡本家全体では、一八件芝居の記録が見られるが、女性たちが見に行った記録はそのうちの六件と少ない。また、年齢も四歳から一七歳の間と比較的見物年齢も若く、おとみに関しては結婚後一度も芝居を見に行っていない。しかし、日記からも分かるように父宇兵衛と一緒に見物した以外にも、姉妹と下女のみで芝居を見ている記録もあり決して芝居に興味がないということでもなかったであろう。父宇兵衛に関しては、相当芝居が好きであったようで、寛延三年(一七五〇)十一月六日に道頓堀の中村十蔵座で、芝居では正月に相当するほどの重要な行事とされる顔見世が行われ、これを庄屋の伊兵衛とともに見に行っている様子が確認できる(⑨四三頁)。岡本家はこういった歌舞伎や人形浄瑠璃といった芝居以外にも、鳥や小人、曲馬といった見世物や相撲、神楽なども見に行っており、周辺地域でも様々な娯楽が行われており、それを享受していたことがうかがえる。

第三節 鉄砲射撃・花火

岡本家の住む上瓦林村の隣には武庫川が流れており、その下流では江戸中期から尼崎藩に仕える砲術家たちによって、鉄砲射撃と花火の打ち上げが行われていた。岡本家も家族でよくこの行事を見に訪れている。

この尼崎藩の砲術について簡単に説明すると、まず享保九年(一七二四)に奥山儀太夫が尼崎藩の砲術指南として迎えられ、明治まで六代にわたって七人が勤めている。その後河合喜兵治・河合左文治も尼崎藩の砲術家となる。さらに寛政年間(一七八九〜一八〇〇)には家松進右衛門が大小姓・代官を勤めながら砲術家として尼崎藩に仕えるようになる。このように寛政以降は、奥山・河合・家松の三氏が尼崎藩の砲術家とし

て勤めている。これらの三氏の砲術家によって藩主の上覧のための鉄砲射撃と花火の打ち上げが寛保二年（一七四二）から行われるようになったのである。^(三六)

続いてそうした砲術家たちによって行われた鉄砲射撃・花火の打ち上げを見物した岡本家の様子についてみていきたい。

この日記で鉄砲射撃・花火について初めて見られるのは、宝暦元年（一七五一）八月三日である。「武庫川表二而、上ヶ火御鉄砲有之由二而、おさよ・おさち・供そめつれ、小松へ参り候所、翌三日之筈にて致逗留候処、雨天故相止」^(⑨四五頁)と書かれており、前日におさよ、おさち、下女のそめが、岡本家と親交の深く、また会場からもほど近い小松村武兵衛宅へ訪れ、翌日の鉄砲射撃と花火の打ち上げに備え一泊している。しかし、翌日の三日は雨が降っていたため、中止になったようである。

次に見られるのが明和四年（一七六七）の八月二五日である^(⑨九一頁)。この日は、尼崎藩の砲術家の一人である、奥山儀太夫の門下によって鉄砲射撃と花火の打ち上げが行われ、尼崎藩主松平忠告も初めて上覧し、多数の見物客で賑わったようである。^(四〇)岡本家も宇兵衛と長女おとみの長男市之進、養子文蔵が朝食後に武庫川に向かい、そこで出会った高木村の平兵衛とともに鉄砲射撃を見物している。その後次女おさち、三女おもん、西宮町のおかち親子、吉兵衛も合流し、ともに見物している。しかし、そのあと雨が降ってきたようで、宇兵衛は一人で道具と敷物の番を任されており、敷物を敷いて見物していたことが分かる。夕方になり、おさち、おもん、文蔵、市之進は小松武兵衛宅へ行き、西宮町のおかち親子、吉兵衛は帰り、宇兵衛と高木村の平兵衛と途中参加の久四郎で花火を見物したようである。その四日後の八月二九日にも、尼崎藩のもう一人の砲術家である河合喜平治の門下によって鉄砲射撃が行われるはずであったが、雨で中止となり、翌日の九月一日に行われた。この日も、尼崎藩主松平忠告が上覧したようである。岡本家からは、前回見に来ていない、長女おとみとおとみの次男菊次郎、下女はま、吉兵衛が午後から鉄砲射撃を見物し、その後市兵衛と万右衛門なども来て見物したようである。

最後に天明元年（一七八一）七月四日の記録がある^(⑩七六、七九頁)。

この日は、奥山儀太夫門下によって鉄砲射撃と花火の打ち上げが行われており、武庫川の西新田村の堤防と小松村の堤防には合わせて一四、五万人の群衆が見物するほどの賑わいであったという。^(四一)この日の岡本家は、家族で一緒に見に行くというよりは各々で見物に行っている。まず当主である市兵衛は三男千之助を連れて昼の一二時に鉄砲射撃を見に行き、夕方一六時ごろに小松村武兵衛宅へ訪問、その後昼の花火を見て一七時ごろに帰宅したようだ。続いて長男勘四郎（市之進）と彦五郎（菊次郎）は一四時ごろに鉄砲射撃を見物し、夕方に小松村武兵衛宅で夕食を食べ、夜の花火を見て深夜二時に帰宅した。一七時ごろには長女おれん、西宮町おわか、治郎兵衛、その妻かん、娘さじが来て二三時頃に帰宅したという。この日は、午前中に鉄砲射撃が行われ、その後昼の花火の打ち上げ、そして午後の鉄砲射撃、最後に夜の花火の打ち上げが行われたようである。午前の鉄砲射撃では奥山儀太夫を含む二七人によって行われ、午後は三人によって鉄砲射撃が行われている。また花火に関しては、昼は八人によって九発打ち上げられ、夜は九人によって二〇発打ち上げられたようである。^(四二)この日打ち上げられた花火玉には、文化文政期の花火番付において五番目の「集星」という名の花火玉が使われており、「此星上へ上り十里あまり一めんの星」と満天の星空のようになる花火が打ち上げられていた。また、一四番目の「往来」は「此火そらにて鳴ること雷の如し」とされ雷のような迫力のある花火だったと考えられる。^(四三)その他番付には載っていないものの、「火乱星」や「昇竜」、「時雨」、「月連星」、「炎龍」、「銀河星」といった、花火玉の名前から壮大な花火であったことが想像できる。

ここまで岡本家の鉄砲射撃と花火打ち上げの見物の様子についてみたが、男女ともに見に行っていることが分かる。しかし岡本家全員で見に行くというよりは、各々のタイミングで、各々の知り合いと見に行っているようである。特に女性は、同じ親交の深い女性同士で行ったり、おとみのように子どもを連れていたりしており、自由な様子がかがえる。また、鉄砲射撃・花火会場からほど近く、頻繁に訪れている小松村武兵衛は、第一節の「寺社参詣」で述べたように小松村の神事にも参加したり、上瓦林村の神事に武兵衛が来たりしていることから非常に親交

が深かった。また、岡本家の女性と行動することが多い、西宮町おかし、おかん、おわかも西宮町の麻屋長兵衛の家族で、麻屋長兵衛宅にも西宮神社の参詣の際にご飯を食べに行くことも見られることから日常的に親しい人物である。

第四節 疱瘡

江戸時代において一生のうち一度は経験せざるを得ない病気として、疱瘡・麻疹・水痘があげられる。その中でも日記からよく見られ、岡本家にとつても身近な病気である疱瘡について、ここでは述べていきたい。

まず疱瘡は、天然痘、痘瘡とも呼ばれ、伊達政宗が幼少期にこの病気に罹り右目を失明したことでよく知られている病気である。非常に感染力が高く、飛沫感染や接触感染によつて広がるとされているものの、一度かかれば終生免疫が得られ、再感染することがないとされている。そのため、江戸時代は「お役」や「お厄」とも呼ばれていた。その症状としては、平均一二日間程度の潜伏期間を経て、急な高熱とともに発病し、顔や頭部を中心に発疹があらわれ、それが膿疱へと変化し、その後かさぶたになり、最後にかさぶたが落ちることで治る。疱瘡による致死率は非常に高く、弘化三年（一八四六）の水戸藩藩医・本間玄調の『種痘活人全弁』では、一〇〇人が疱瘡にかかれば、三〇人は死亡し、三〇人は「痘痕」や「盲聾」、四肢の障害が残るとされており、また伊達政宗のような疱瘡による中途失明者も多かったようである。「痘痕」に関しては、現在の研究では六五〜八五％の人に痘痕が残るとされており、たとえ命が助かったとしても痘痕が残ることが多かったため、江戸時代の特に女子の場合は将来の縁組に影響するとして恐れられていた。その疱瘡の流行頻度として文化一〇年（一八一三）の橋本伯寿の『国字断毒論』では、田舎は六、七年に一度の流行に対し、江戸や京、大坂では常に途絶えることのないものであったとしている。そのような致死率も高く、後遺症も大きい疱瘡であるが、岡本家の子どもたちはどうであったのだろうか。最初

に「寛延三年（一七四九）の一二月二八日である。「当国生野村二疱瘡之御守出候二付、内ノおとみ・おさち・小松村之式人・舟屋安之丞・大坂京屋彦太郎、以上六人、十二燈二而御守請二八兵衛雇遣ス。」（⑨四〇頁）とあり、摂津国の生野村（現・大阪府生野区・天王寺区）で疱瘡の御守りが販売されたため、当時五歳のおとみ、三歳のおさち、その他親戚や親しい人物の子どもたちの分を同村の八兵衛に買いに行ってもらっている。しかし、その六年後の宝暦五年（一七五五）に「尼崎築地ニ而此方娘おとみ四月末よりかるく疱瘡仕、所々御見舞等此方へも来ル。右之為祝儀六月廿五日安太郎同道ニ而帰り、同十六日赤飯仕、御見舞請候。所々并一家内へ遣ス。当村ハ大小家不残重ノ内配り申候。」（⑨五〇頁）とあり、おとみが一歳のときに疱瘡に罹つたものの、重症化はせず、約二カ月の療養期間を経て完治したようである。その際には、上瓦林村の家々に赤飯を配り、疱瘡祝いをした様子がかがえる。疱瘡の発症している間は、岡本家のある上瓦林村ではなく、母おさよの実家である築地で療養していることが分かり、妹たちに感染させないための隔離措置か治療の場所として上瓦林村よりも栄えている築地町を選んだとも考えられる。

続いて見られるのが、宝暦一〇年（一七六〇）で、「三月上旬迄二おもん疱瘡仕上ケ申候」（⑨六一頁）と書かれており、三月上旬ごろに当時九歳の三女おもんが疱瘡に罹つたようである。しかし、「同二十六日、おもん疱瘡祝ひ。赤飯村中配り、他所ハ築地舟や井上正立殿・伊舟や・灘や利右衛門殿・小松武兵衛殿・山田清右衛門殿」とあり、三月二六日に約二週間で疱瘡は完治し、村中と親戚や親しい人物におとみの時と同様に赤飯を配っている。三姉妹に関しては、長女おとみ、三女おもんが疱瘡に罹り、次女おさちは疱瘡には罹らなかったようである。その他にも岡本家の男子も疱瘡に罹っており、その事例も紹介したい。

明和五年（一七六八）に「当月四日・五日頃分文蔵疱瘡仕候間、十六七日迄二快氣仕候」（⑪七頁）とあり、養子で当時八歳の文蔵が一月四・五日頃に疱瘡に罹り、約二週間の療養を経て完治したようである。ここでは、疱瘡祝いの様子は見られない。しかし、その翌月の二月二日には「同日、常齋仕苦二候得とも、市之進・菊次郎疱瘡仕候二付両寺へ御齋米遣し候事」（⑪七頁）とあり、おとみの長男で当時八歳の市之進と次男で当時四歳の菊次郎が疱瘡に罹つた様子である。その後「同十七日、市之進・菊次郎疱瘡無滞相仕廻候二付、悦び赤飯村中江配り組中庄屋中

ひ御見舞被下候故、不残遣申候」(⑪八頁)とあり、およそ二週間の療養を経て完治し、赤飯を村中に配ったようである。おとみやおもん、文蔵との違いは、市之進が岡本家の後継者であるため組中や庄屋中からお見舞いを受けていることである。それほど、跡継ぎである男子が岡本家の子どもたちの中でも特別な存在であったことがうかがえる。また、この時代に跡継ぎの男子に恵まれても、疱瘡という壁を乗り越えなければならなかったことを感じさせる。その後「同五日文蔵、一二日市之進、一五日二ハ菊次郎、右三人とも疱瘡のいみ明キ七十五日宛過候節、氏神江十二燈包召つれ、参詣仕候。目出度申納候」(⑪九頁)とあり、翌年明和六年(一七六九)の二月五日に文蔵、一二日に市之進、一五日に菊次郎が疱瘡による七五日間の忌期間を終え、宇兵衛が氏神である日野神社へ三人を連れて参っている。宇兵衛自身も安心しているようである。

最後に見られるのが、安永七年(一七七八)で、「当月朔日今千之助疱瘡仕、右二續キおれんも仕、無滞相仕舞、目出申納候」(⑪六九頁)とあり、五月一日におとみの三男で四歳の千之助が疱瘡になり、その後長女で一三歳のおれんも罹ったようである。六月八日には「子共兩人疱瘡無滞相濟候二付、赤飯仕、御見舞等請候□□□并一家内へ、右八日に配り遣シ申候」(⑪六八頁)とあり、約一カ月の療養期間を経て完治し、赤飯を配ったことがうかがえる。

江戸時代において感染性も致死率も非常に高い小児感染症である疱瘡であるが、岡本家の子どもたちのほとんどがその病に罹っていたことが分かる。唯一次女おさちは幼少期に疱瘡に罹っていないものの、のちに種物病を患っており、これも疱瘡に関係するのかもしれない。疱瘡に罹った年齢としては、四歳から一三歳と幅広い。また、療養期間としてはほとんどが二週間程度であるが、「かるく疱瘡」と書かれていたおとみのみ二カ月と長期療養であった。この日記で疱瘡の治療に関して医者に診てもらったり薬をもらったりといったような記載はなかったため、自宅療養で自然治癒であったのだろう。また、痘痕に関する記述も見られないため、ひどい痘痕は残らなかったと考えられる。江戸中期において、岡本家のようにほとんどの子どもが罹っているものの、全員完治しており後遺症も見られないことは当時としては非常に稀であっただろう。この

疱瘡が治癒したという経験を経て、岡本家の人々は疱瘡神を祀る中山寺や疱瘡の御利益のある昆陽寺への信仰を深めることになったと思われる。

第五節 愛玩動物

岡本家では、猫や犬といった愛玩動物を飼育していたことが日記から見られる。

一番初めに見られるのは、宝暦九年(一七五九)六月四日で「中山寺へ参り掛、造り茶屋泉や半兵衛方二而虎毛猫もらい持帰り候」(⑨五九頁)と記されている。ここから中山寺へ参詣に行く途中に宇兵衛がよく立ち寄る茶屋泉屋半兵衛から虎柄の猫をもらい、家に持ち帰っている様子うかがえる。しかし、その後の虎毛猫については日記には記されておらず、行方は分からない。

その翌月の七月一日には、「次手二白にまだらいぬつれ帰り飼申候」(⑨五九頁)と書かれており、尼崎へお米を取りに行ったときに宇兵衛がこの犬を連れ帰ったようである。しかし、その後この犬がメスであったことから西宮町で放し、代わりに西宮町で同じまだら模様の犬を連れ帰っている。これは子供たちにはれないようにするためであったのだろう。しかし、この犬のその後に関しても不明である。

続いて明和六年(一七六九)九月二四日に、「小濱二而あかまだらいぬ取り帰り、則名犬と名付申候」(⑪二二頁)と書かれており、中山寺の帰りに小濱村(現・宝塚市)で赤い毛のまだら模様の犬を持ち帰り、その後「犬」という名前を付けたようである。この中山寺へは宇兵衛のほかにも岡本家の養子であり、当時九歳であった文蔵も同行していることから、文蔵の意向も少しは含まれていたのかもしれない。この「犬」については、その後も岡本家で大切に飼われたようである。安永二年(一七七三)三月三日に亡くなり、埋葬されたことが日記に記されている(⑪三六頁)。

明和九年(一七七二)二月二五日にも「手習い子共、西宮天神へ参り、濱二而犬之子持帰り二付、灰毛犬、大けんと名付申候」(⑪三六頁)と書かれており、手習いに行っていた市之進、文蔵が西宮の浜の方で小犬を持ち帰り、この小犬に「大犬」とつけたという。この時期には岡本家に赤い毛のまだら模様の犬の「犬」と灰色の毛の「大犬」の二匹を飼って

いたことになる。

そしてこの「犬」が亡くなった翌年の安永三年一月二〇日に「小犬つれ帰り犬犬と名付候」(①四二頁)と書かれており、宇兵衛が孫である菊次郎を連れ西宮神社に参詣に行った帰りに、小さい犬を連れて帰り再び「犬犬」と名付けた様子が分かる。この時期には、もう一代目「犬犬」はいなかったのだろう。

このように岡本家は猫や犬といった動物を愛玩として飼っていたのである。特に犬に関しては、この「数歳萬覚日記帳」の書かれた延享三年(一七四六)から天明三年(一七八三)までの三七年間に四匹も飼育しており、名前を付けるほど大切にされていた。また、誰かにもらうというよりも拾ってくる、連れ帰ってくるが多いため、当時野良犬が町や村に多く存在していたことがうかがえる。江戸時代の愛玩犬に関しては寛政五年(一七九三)に犬の飼育書である『犬狗養蓄傳』が刊行され、ベストセラーになるなど江戸中期末には多く広がっていたようである。岡本家の子どもたちだけではなく、宇兵衛自身も宝暦九年七月に犬を持ち帰っていることから犬好きだったのであろう。

おわりに

本稿では、岡本家文書の「数歳萬覚日記帳」から六代目岡本宇兵衛の娘たちであるおとみ、おさち、おもんに焦点をあて、大庄屋家女性の余暇の行動についてみてきた。

最後に、はじめにふれた武州橘樹郡生麦村の関口家の女性と岡本家の三姉妹との結婚・余暇について比較したい。

関口家のある武州橘樹郡生麦村は、東海道中の川崎宿と神奈川宿の間に位置し、日本橋まで二六キロメートルほどの隣海村で、関口家はその村の地方地区の名主を勤めた家である。岡本家も大坂までは約二〇キロメートルで大庄屋・庄屋を勤めていたため、似ている部分が多い。

はじめに結婚についてみると、関口家の女子の場合一〇歳から一二、三歳まで関口家の手習い塾に通い、そこから五、六年ほど江戸へ武

家奉公に行き良家を探し、その後帰村して、一九歳ごろには村役人や江戸商人と結婚に至っている。一方岡本家の場合、母の実家があり上瓦林村より栄えている尼崎築地町で一歳から手習いや行儀作法などを身に付け、そこから父宇兵衛の人脈やつながりによって周辺の同等の家と二四、五歳で結婚に至っている(おとみのみ一六歳と早い)。このように関口家は都会に出て教養を身に付け、良縁を探すといった結婚に対して積極的に行動し早くに結婚しているが、岡本家は周辺の村とのつながりによってじっくりと吟味した上、二〇代半ばで結婚している。

また母の役割として、関口家の場合、江戸にある娘の奉公先や息子の入塾先への送迎が行われている。しかし岡本家の場合おとみの長男市之進と養子文蔵も手習いに行っていたのだが、同村の医者（孫）の泰仙老のもとへ通っているため、送迎といった役割はみられない。また、岡本家は三世帯の家持下人を抱えていたため、宇兵衛とおとみの子どもたち(孫)と下人といったメンバーで行動することはよく見られるもの、おとみが子どもを連れて出かけることは年礼や安産の御礼参りなど限られている。

外出・外泊に関しては、関口家の場合、姑となった五〇から六〇歳代に外泊や外出の増加の傾向があるとしているが、岡本家の場合、おとみ三九歳までしか分ならず長男市之進(勘四郎)もまだ結婚していないため、あまり比較できない。しかし外出・外泊の内容を見ると、関口家の場合は神社参詣や温泉がよく見られるが、岡本家は神社参詣も多いものの、芝居や鉄砲射撃・花火などの見物もして、その土地よっての違いも見られた。また、関口家は江戸や鎌倉といった遠方への外泊も多いが、岡本家は周辺の村の親交の深い家に泊まることは多いものの、遠方への外泊は伊勢神宮しか見られない。このように外出に関しては、関口家の女性は自由に行動する様子が見られるが、岡本家は家族で行動することが多く、鉄砲射撃・花火のときのみ自由な様子が見られる。

時代も近く、家や土地柄も似ている部分の多い関口家と岡本家であったが、結婚や外出をとっても大きな違いが見られる。関口家は、現代に近いような都会的であるのに対して、岡本家は村や家同士のつながりに重きを置いているように感じられた。

今回の研究では大庄屋家女性の日常生活についてみてきた。結婚に関しては、あまり深く述べられなかったが、おとみは大庄屋当主の長女であることから結婚後も岡本家に残り、当主の妻として母の役割を担わなければならず、負担も大きかったであろう。また、次女おさちと三女おもんも外城村の総屋大塚家や山田村吉田家といった大きな家に嫁いだことで、その後の岡本家と強いつながり築いていった。岡本家にとってこの三姉妹の果たした役割は非常に大きかったのである。

また余暇の行動として寺社参詣や芝居、鉄砲射撃・花火の様子を取り上げたが、父宇兵衛が長女おとみ八歳、次女おもん六歳の時に大庄屋を退役していることにより、三姉妹はほとんど宇兵衛とともに寺社参詣や芝居を見に行っている。また、宇兵衛は妻おさよが亡くなってから正式な再婚はしていないため、下人はいたものの宇兵衛が娘たちを育てたのである。幼少期から娘たちを寺社参詣や芝居見物などをさせ、村内村外での人との交流もさせている父宇兵衛も偉大であった。

大庄屋家女性の日常生活の中でも余暇について検討したが、明らかにできなかった部分が非常に多い。特に芝居に関しては、行われた地域は分かるものの、それが地芝居であったのか、芝居小屋があったのかなど不明な点が残っている。また、岡本家に関しても前期に遡ることで中期において岡本家と交流の多い家との関係性も見ることができたのではないかと考える。

謝辞

本論文作成にあたりご協力いただきました衛藤彩子氏（西宮市立郷土資料館）に厚く御礼申し上げます。

注

(一) 白川部達夫「享保・元文期の摂津の農業経営と肥料―武庫郡上

瓦林村岡本家の場合―」（『東洋学研究』第五七巻、東洋学研究所、二〇二〇年）。

(二) 大竹秀男『家』と女性の歴史（弘文堂、一九七七年）。

(三) 長島淳子「近世後期における女性の行動の「自由」と家事労働―武州橘樹郡生麦村「関口日記」を素材として―」（『幕藩制社会のジェンダー構造』、校倉書房、二〇〇六年）。

(四) 衛藤彩子「岡本宇兵衛の日記を読む」（西宮市立郷土資料館『西宮市立郷土資料館ニュース』第三九号、二〇一三年）五頁。

(五) 前掲注（一）、一三一頁。

(六) 宮下美智子「享保―寛保期における農家家計―摂津国武庫郡上瓦林村岡本家の場合―」（『大阪学藝大学紀要』第一四巻、大阪学藝大学、一九六六年）。

(七) 西宮市立郷土資料館『西宮の古文書―岡本家文書の世界―』（西宮市立郷土資料館、二〇一四年）。

(八) 西宮市史編集委員会『岡本俊二氏文書目録』（一九五七年）。

(九) 市兵衛によって書かれたのは、宇兵衛が亡くなる直前の安永八年四月一六日から天明三年までであり、大部分は宇兵衛によって記されている。

(一〇) 西宮市立郷土資料館『研究報告』第九集（西宮市立郷土資料館、二〇一一年）。

以下本稿では、第九集の頁数を本文中に（⑨）頁と記す。

(一一) 西宮市立郷土資料館『研究報告』第十一集（西宮市立郷土資料館、二〇一七年）。

以下本稿では、第十一集の頁数を本文中に（⑪）頁と記す。

(一二) 前掲注（四）、六頁。

(一三) 前掲注（四）、八頁。

(一四) 前掲注（一）、一四五頁。

(一五) 『松誉浄月寿清往生香奠』（宝暦六年、西宮市立郷土資料館所蔵）。

(一六) 関西学院大学図書館ウェブサイト「灘の酒造り」参照。

(一七) 伊丹市史編纂委員会『伊丹市史』第二巻（伊丹市、一九六九年）、九七頁。

- (一八) 文蔵に関しては非常に複雑で、母は岡本家の家持下人である惣次郎の娘のしな(さん)であるものの父親の存在は明確には記されていない。しかし宝暦一年の宗門人別帳には、宇兵衛と親交の深い上瓦林村の万右衛門の息子として記録されており、母しなは岡本家の下女として岡本家へと移っている。その一方で「数歳萬寛日記帳」には、文蔵に関して細かく記載され、結果下人から大庄屋の養子となっているため、宇兵衛と関係があるのかもわからない。
- (一九) 『宗官人家御改帳』(文化一四年、西宮市立郷土資料館所蔵)。
- (二〇) 『宗官人家御改帳』(寛延三年、西宮市立郷土資料館所蔵)。
- (二一) 関西学院大学図書館ウェブサイトに「灘の酒造り」参照。
- (二二) 前掲注(一七)、一六八頁。
- (二三) 田中義明「上田秋成晩年の文芸表現とその背景―谷川家新資料を中心に―」(『研究紀要』第四号、関西女子学院短期大学、一九九一年)、二〇四頁。
- (二四) 前掲注(二)、六八頁。
- (二五) 秋里籬島『撰津名所圖會 河邊郡六下』(寛政八年〜一〇年刊、国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (二六) 石川道子「西国二十四番札所中山寺と中山寺村―参詣客の誘致策―」(追手門学院大学経済学会『追手門経済論集』第四十一巻第一号、二〇〇六年)、一七頁。
- (二七) 井阪康二「ねがい一生と死の仏教民俗」(岩田書院、二〇〇二年)、一三三頁。
- (二八) 伊丹市史編纂委員会『伊丹市史』第一巻(伊丹市、一九七二年)、三〇六頁。
- (二九) 『諸国図会年中行事大成』巻二(文化三年刊、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」)。
- (三〇) 中野猛『略縁起集成』第六巻(勉誠出版、二〇〇一年)、一五七頁。
- (三一) 『宗官人家御改帳』(宝暦一年、西宮市立郷土資料館所蔵)。
- (三二) 西宮神社文化研究所『えびすさまよもやま史話』西宮神社御社
- (三三) 前掲注(三二)、一一一頁。
- (三四) 魚澄惣五郎『西宮市史』第二巻(西宮市役所、一九六〇年)、八九四頁。
- (三五) 「義経千本桜」(ジャパナレッジ『新版歌舞伎事典』)。
- (三六) 「高麗橋姫踊念仏」(ジャパナレッジ『歌舞伎・浄瑠璃外題よみかた辞典』)。
- (三七) 市島春城『新群書類従』第三(国書刊行会、一九〇八年)。
- (三八) 「奥州安達原」(ジャパナレッジ『日本大百科全書』)。
- (三九) 岡本静心『尼崎市史』(第二巻、尼崎市役所、一九六八年)、九〇三頁。
- (四〇) 前掲注(三九)、九〇四頁。
- (四一) 前掲注(三九)、九〇五頁。
- (四二) 前掲注(三九)、九〇三頁。
- (四三) 前掲注(三九)、九〇六頁。
- (四四) 鈴木則子『近世感染症の生活史 医療・情報・ジェンダー』(吉川弘文館、二〇二二年)、一六八頁。
- (四五) 曉鐘成『犬狗養畜傳』(寛政五年刊、国立国会図書館デジタルアーカイブ)。
- (四六) 前掲注(三)。
- (四七) 用日記を読む(神戸新聞総合出版センター、二〇一九年)、一〇五頁。